

どうすれば 安全安心

手術、放射線と並ぶがん治療の3大選択肢の一つ、抗がん剤。以前は「副作用が強くつらい」とのイメージがあつたが、近年はそれを抑える優れた薬が続々と開発され、苦痛を軽減しながら治療を受けられるようになつた。念のために」と受けた検査で予想もしない診断が出た。肺がんだった。がん細胞が胸の中全體に散り、胸に水がたまっていた。

最も進行した「ステージ4」の状態。既に手術や放射線照射ができる状態ではなかったため、医師から抗がん剤による治療が勧められた。「本当に効くのだろうか」。

「抗がん剤単独で奏効させるような薬はまだ少なく、他臓器に転移した進行再発がんを治すのも難しいのが現状ですが、その一方で、がん治療の状況はこの10年ほどでがらりと変わりました。抗がん剤といえど『効く』『効かない』で考えますが、二分して考えてしまって誤解を招きます」と話すのは、日本医科大学肿瘤小杉病院腫瘍内科教授の勝俣範之さんだ。

固形がん(血液がん以外のがん)に抗がん剤治療をする目的は、大別して二つある。一つは、手術や放射線治療の後、目に見えない転移の可能性がある患者に投与し、再発を防いで完治の率を高めるためで「術後補助療法」という。もう一つが、転移や再発をした患者の延命のためだ。後者は治療する可能性は高くはないが、がんとで生きるだけ長く付き合っていくことを目指す。「確かにがんは強敵で、つい治療をしなければ闇えないのであります。ですが、それを支える癌も進化している。がん細胞

40代の男性会社員、Aさんは急に激しくせき込むようになり、その後は息苦しさを感じるようになつた。念のために」と受けた検査で予想もしない診断が出た。肺がんだった。がん細胞が胸の中全體に散り、胸に水がたまっていた。

がん細胞が胸の中全體に散り、胸に水がたまっていた。

がん細胞が胸の中全體に散り、胸に水がたまっていた。

手術、放療と並ぶがん治療の3大選択肢の一つ、抗がん剤。以前は「副作用が強くつらい」とのイメージがあつたが、近年はそれを抑える優れた薬が続々と開発され、苦痛を軽減しながら治療を受けられるようになつた。念のために」と受けた検査で予想もしない診断が出た。肺がんだった。がん細胞が胸の中全體に散り、胸に水がたまっていた。

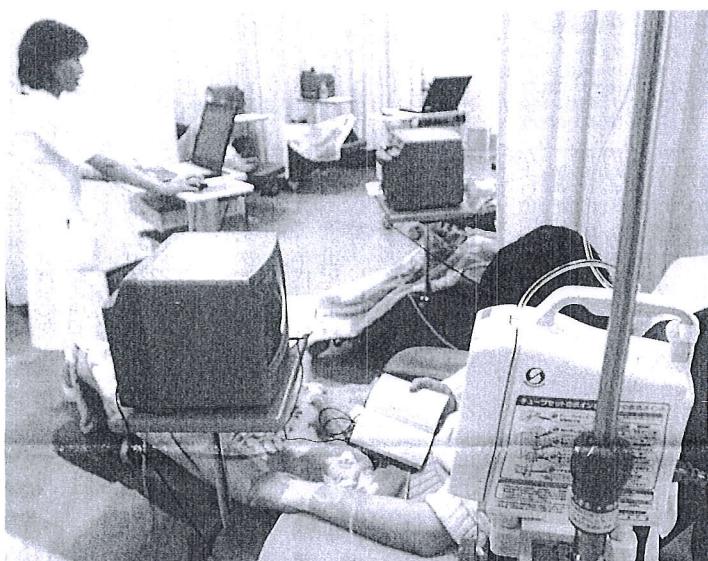
手術、放療と並ぶがん治療の3大選択肢の一つ、抗がん剤。以前は「副作用が強くつらい」とのイメージがあつたが、近年はそれを抑える優れた薬が続々と開発され、苦痛を軽減しながら治療を受けられるようになつた。念のために」と受けた検査で予想もしない診断が出た。肺がんだった。がん細胞が胸の中全體に散り、胸に水がたまっていた。

## 抗がん剤とどうつき合うか

がんを治すのに必要な薬はなく、薬をうまく使っていくことで、がんと共に生きていける時代になつてきました」と勝俣さんは力説する。

【庄司哲也】

## 今の生活の維持に重点



リラックスしながら抗がん剤の外来通院治療を行う抗がん剤  
東京都市内で大四連也撮影

### 優れた制吐薬が登場

### 1剤を継続する方法も

がんに伴う症状や治療の副作用を予防したり、軽減させたりするための治療は「支持療法」と呼ばれる。勝俣さんによると、今は9割以上の抗がん剤が外来通院での治療が可能という。言い換ればそれだけ副作用対策が進んだということだ。「抗がん剤治療は必ず入院して行うという時代では、もうなくなっているのです」

複数の抗がん剤で治療を受けたAさんはがんが縮小し、病状も安定。悪性胸膜中皮腫の治療にも使われるペメトレキセド(製品名アリムタ)という剤(点滴)で、外来通院治療を続けることになつた。ペメトレキセドのように副作用が比較的少ない薬を使い、現状維持や悪化予防のため継続的に行う治療は「維持療法(メントナンス)」と呼ばれる。

以前はシスプラチンなどを併用した治療を4~6ヶ月間行い、がんが縮むなど病勢が収まるといつたん投薬を休んでいたが、維持療法では休薬期間を設げずに1剤まで休薬期間を設げずに1剤まで

たばの剤をそのまま使い続ける。「維持療法は副作用が少なく、生活の質を保ちながら長期間続けられるメリットがあります。肺がんに栄養を供給するための新たな血管づくりを阻害する「ベバシズマブ(製品名アバスチニン)」も、維持療法に使われる抗がん剤です」。国立がん研究センター東病院呼吸器外科長の坪井正博さんはそう説明する。



### 9割以上が外来治療可

がんに伴う症状や治療の副作用を予防したり、軽減させたりするための治療は「支持療法」と呼ばれる。勝俣さんによると、今は9割以上の抗がん剤が外来通院での治療が可能という。言い換ればそれだけ副作用対策が進んだということだ。「抗がん剤治療は必ず入院して行うという時代では、もうなくなっているのです」

複数の抗がん剤で治療を受けたAさんはがんが縮小し、病状も安定。悪性胸膜中皮腫の治療にも使われるペメトレキセド(製品名アリムタ)という剤(点滴)で、外来通院治療を続けることになつた。ペメトレキセドのように副作用が比較的少ない薬を使い、現状維持や悪化予防のため継続的に行う治療は「維持療法(メントナンス)」と呼ばれる。

以前はシスプラチンなどを併用した治療を4~6ヶ月間行い、がんが縮むなど病勢が収まるといつたん投薬を休んでいたが、維持療法では休薬期間を設げずに1剤まで休薬期間を設げずに1剤まで

たばの剤をそのまま使い続ける。「維持療法は副作用が少なく、生活の質を保ちながら長期間続けられるメリットがあります。肺がんに栄養を供給するための新たな血管づくりを阻害する「ベバシズマブ(製品名アバスチニン)」も、維持療法に使われる抗がん剤です」。国立がん研究センター東病院呼吸器外科長の坪井正博さんはそう説明する。

がんに伴う症状や治療の副作用を予防したり、軽減させたりするための治療は「支持療法」と呼ばれる。勝俣さんによると、今は9割以上の抗がん剤が外来通院での治療が可能という。言い換ればそれだけ副作用対策が進んだということだ。「抗がん剤治療は必ず入院して行うという時代では、もうなくなっているのです」

複数の抗がん剤で治療を受けたAさんはがんが縮小し、病状も安定。悪性胸膜中皮腫の治療にも使われるペメトレキセド(製品名アリムタ)という剤(点滴)で、外来通院治療を続けることになつた。ペメトレキセドのように副作用が比較的少ない薬を使い、現状維持や悪化予防のため継続的に行う治療は「維持療法(メントナンス)」と呼ばれる。

以前はシスプラチンなどを併用した治療を4~6ヶ月間行い、がんが縮むなど病勢が収まるといつたん投薬を休んでいたが、維持療法では休薬期間を設げずに1剤まで休薬期間を設げずに1剤まで

たばの剤をそのまま使い続ける。「維持療法は副作用が少なく、生活の質を保ちながら長期間続けられるメリットがあります。肺がんに栄養を供給するための新たな血管づくりを阻害する「ベバシズマブ(製品名アバスチニン)」も、維持療法に使われる抗がん剤です」。国立がん研究センター東病院呼吸器外科長の坪井正博さんはそう説明する。